モリスコのリコーテとその娘アナ・フェリスのエピソード（『ドン・キホーテ』後篇）における改宗者[1]

三　倉　康　博

（受付　2017年10月27日）

1. はじめに

グラナダ陥落（1492）によりイスラーム・スペイン最後の王朝ナスル朝が滅亡し，スペインのキリスト教徒が数世紀にわたってムスリムに対しおこなってきたレコンキスタ（国土回復運動）が完了した後もイベリア半島に残留し，16世紀初頭にキリスト教への改宗を強制されたムスリムとその子孫であるモリスコ（moriscos）は，そのキリスト教信仰の内実とスペインへの忠誠を疑われ続け，異端審問所をはじめとする当局諸機関の監視と抑圧の対象となった。キリスト教化やスペイン社会への同化が進んだモリスコも存在したものの，全体としてはキリスト教スペイン社会に十全に統合されぬまま，モリスコたちは1568－1571年のグラナダ地方における大規模な反乱とその鎮圧中から始まった国内強制移住を経て，フェリペ３世（在位1598－1621）統治下の1609－1614年にそのほとんど（代表的な研究によれば約30万人）が国外追放されるに至る[2]。このモリスコ問題は当時のスペイン国内で大きな関心の的であったが[3]，ミゲル・デ・セルバンテス・サアベドラ（Miguel de Cervantes Saavedra, 1547–1616）も同時代人として無関心ではいられなかった。彼は晩年の『模範小説集』（*Novelas ejemplares*, 1613）中の「犬の対話」（“El coloquio de los perros”），さらに『ドン・キホーテ』後篇（*Don Quijote* II, 1615）や遺作長篇『ペルシーレスとシヒスムンダの苦難』（*Los trabajos de Persiles y Sigismunda*, 1616）のなかのモリスコが登場するエピソードで，当時の歴史的状況を強く反映しつつ，追放前夜のモリスコ問題，さらには追放そのものを描いている。とりわけ，ドン・キホーテの従者サンチョ・パンサ（Sancho Panza）の友人である善良なモリスコ，リコーテ

1　本稿は日本イスパニヤ学会第61回大会（2015年10月，於神田外語大学）における同タイトルの口頭発表に加筆修正を施したものである。

2　モリスコ問題に関する歴史学的研究は，特に20世紀に入って大きく進展しているが，代表的な概説書として，たとえば，Antonio Domínguez Ortiz & Bernard Vincent, *Historia de los moriscos. Vida y tragedia de una minoría*, Madrid: Revista de Occidente, 1979が挙げられる。追放されたモリスコの総数については，同書は約30万人という数字を挙げている（p. 200）。

3　同時代の関心については，María Luisa Candau Chacón, *Los moriscos en el espejo del tiempo. Problemas históricos e historiográficos*, Huelva: Universidad de Huelva, 1997, pp. 24–50およびMiguel Ángel de Bunes Ibarra, *Los moriscos en el pensamiento histórico*, Madrid: Cátedra, 1983, pp. 13–55が詳しい。

（Ricote）と，その娘で真摯なキリスト教信仰を持つモリスコ女性であるアナ・フェリス（Ana Félix）が追放の悲運を経験する，『ドン・キホーテ』後篇のエピソード（54，63－65章）は，こうした諸エピソードのなかで最も名高いものである。

先行研究はこのリコーテとアナ・フェリスのエピソードについて，様々な視点から議論を展開してきた。とりわけ，リコーテ自身がモリスコを非難したり，モリスコ追放を支持したりする言葉を発する点に注目し，同様に作中人物たちが――しばしば当のモリスコ自身が――反モリスコ的な発言をする他のエピソードも取り上げつつ，セルバンテスのモリスコ観を分析対象としてきた。セルバンテスは自身が創造したそうした作中人物たちと意見を同じくする反モリスコ論者，追放支持論者であったという説[4]もあれば，作中人物たちの言葉とセルバンテスの真意を同一視すべきでないという説もある[5]。

4　古くは，マルセリノ・メネンデス・ペラヨやマルセル・バタイヨンがこうした説を唱えている (Marcelino Menéndez Pelayo, *Historia de los heterodoxos españoles*, 3vols, ed. facsímil, Madrid: CSIC, 1992 (1ª ed., 3vols., Madrid：Librería Católica de San José, 1880－1881), II, p. 343; Marcel Bataillon, *Erasmo y España*, tr. Antonio Alatorre, México D.F.: FCE,. 2ª ed. corregida y aumentada, 1966 (1ª ed. en francés, 1937; 1ª ed. en español, 1950), pp. 796－797)。近年の研究でこうした見方を示しているものとしては，Enrique Moreno Báez, “Perfil ideológico de Cervantes”, in Juan Bautista Avalle-Arce & Edward C. Riley (eds.), *Suma Cervantina*, London: Támesis, 1973, pp. 263－264; Michel Moner, “El problema morisco en los textos cervantinos”, in Irene Andres-Suárez (ed.), *Las dos grandes minorías étnico-religiosas en la literatura española del Siglo de Oro: los judeoconversos y los moriscos. Actas del “Grand Séminaire” de Neuchâtel. Neuchâtel, 26 a 27 de mayo de 1994*, Paris: Diffusion Les Belles Lettres, 1995, pp. 85－100; Candau Chacón, *op.cit*., pp. 37－50; Fernando Torres Antoñanzas, *Don Quijote y el absoluto. Algunos aspectos teológicos de la obra de Cervantes*, Salamanca: Publicaciones Universidad Pontificia de Salamanca, 1998, pp. 78－81が挙げられる。

5　こうした見解の先駆はアメリコ・カストロであり，1925年に上梓した名著『セルバンテスの思想』（*El pensamiento de Cervantes*）のなかで，セルバンテスが追放を支持する公的な視点を提示する一方で，そこには時にアイロニー（ironía）が込められており，また追放されたモリスコたちの視点も取り入れていること，さらに信仰の自由を認めた他のヨーロッパ諸国とそれを認めなかったスペインの対比がモリスコの登場するエピソードに見られることを指摘している（Américo Castro, *El pensamiento de Cervantes y otros estudios cervantinos*（*Obra Reunida, I*），Madrid: Trotta, 2002（1ª ed., Madrid: Imprenta de la Librería y Casa Editorial Hernando, 1925），pp. 267－273）。近年では，フランシスコ・マルケス・ビリャヌエバがこうした研究潮流の代表格であり，大きな影響を及ぼしている。彼によれば，登場人物とセルバンテスのあいだには距離があり，前者の反モリスコ的発言には実はアイロニーが込められており，セルバンテス本人の考えは異なるという。そしてセルバンテスはキリスト教スペイン社会へのモリスコの統合をあくまで理想とする穏健論者であり，内心では追放に批判的で，リコーテとアナ・フェリスのエピソードにおいては，アナ・フェリスとドン・ガスパル・グレゴリオの愛を描くことで，混血によってモリスコ問題を解決する可能性を示唆していたのだと論じている（Francisco Márquez Villanueva, *Personajes y temas del* Quijote, Madrid: Taurus, 1975, pp. 229－335: *El problema morisco (desde otras laderas)*, Madrid: Libertarias, 1998, pp. 181－185）。彼の言葉を引用しよう。「モリスコに関するセルバンテスの考えは，そのあらゆる主要な論点において，穏健派の意見と一致する。穏健派の意見は深い法・倫理的責任感に規定されるのだが，それはセルバンテスのなかにその完璧な文学的表現を見出したのである」（*Personajes y temas del* Quijote, p. 316）。近年の研究動向はマルケス・ビリャヌエバの強い影響を受けている。たとえば，Otilia López Fanego, “Algo más sobre Sancho y Ricote”, *Anales Cervantinos*, 21 (1983), pp. 73－81; María Soledad Carrasco Urgoiti, “Musulmanes y moriscos en la obra de Cervantes: beligerancia y ↗

その他の切り口からの研究も数多く[6]，リコーテとアナ・フェリスのエピソードに関しては，

↘ empatía", *Fundamentos de Antropología*, 6–7 (1997), pp. 74–75; "Presencia de la mujer morisca en la narrativa cervantina", in Nuria Martínez de Castilla Muñoz & Rodolfo Gil Benumeya Grimau (eds.), *De Cervantes y el Islam. Actas del encuentro Cervantes, El «Quijote», lo moro, lo morisco y lo aljamiado celebrado en Sevilla, los días 19–21 de mayo de 2005*, Madrid: Sociedad Estatal de Conmemoraciones Culturales, 2006, pp. 117–133; David Domínguez-Navarro, "El mundo de la frontera: cambio de religión y choque cultural de los personajes moriscos del *Quijote*", in Christoph Strosetzki (ed.), *Visiones y revisiones cervantinas: actas selectas del VII Congreso Internacional de la Asociación de Cervantistas*, Alcalá de Henares: Centro de Estudios Cervantinos, 2011, pp. 285–291; Ana L. Baquero Escudero, "Variaciones literarias sobre la expulsión de los moriscos: Cervantes y Lope de Vega", *Murgetana*, 131 (2014), pp. 16–19は彼と同様の方向性を示しているし，Richard Hitchcook, "Cervantes, Ricote and the Expulsion of the Moriscos", *Bulletin of Spanish Studies*, 81.2（2004），pp. 175–185は，セルバンテスの本心について結論を下すのは避けているが，リコーテのエピソードに多重のアイロニーが込められていることを指摘している。René Quérillacq, "Los moriscos de Cervantes", *Anales Cervantinos*, 30（1992），pp. 77–98は，マルケス・ビリャヌエバの解釈を継承しつつ，モリスコが登場するセルバンテスの諸エピソードは物語（relato）レベルでは反モリスコ性が強いが，言説（discurso）レベルでは逆に追放政策への批判が読み取れると指摘している。

一方，Julio Baena, "Sintaxis de la ética del texto: Ricote, en el *Quijote* II, la lengua de las mariposas", *Bulletin of Spanish Studies*, 83.4（2006），pp. 507–524は，モリスコ追放を決断した王や重臣を称賛するリコーテの言葉――マルケス・ビリャヌエバはそこにアイロニーを見出した――がむしろ字義通りに解釈できる可能性を指摘し，追放の被害者であるリコーテにそのような発言をさせるスペインの罪をセルバンテスのテクストが暴いていると論じている。Stanislav Zimic, *Los cuentos y los episodios del* Quijote, Madrid: Iberoamericana, 1998, p. 294も，リコーテはモリスコを追放した人々の論理と本心から一体化している可能性があり，それが追放の不合理さを暴いていると論じている。

なお，リコーテ父娘へのセルバンテスの同情は，セルバンテスが追放支持者であったとする先行研究もそれを否定する先行研究も，一致して認めている。

6 モリスコの地域的多様性――セルバンテスの時代，バレンシア地方のモリスコはキリスト教化が進んでいなかったが，カスティリャ地方のモリスコはキリスト教社会への同化が進んでいた――をセルバンテスはよく認識しており，それが『ドン・キホーテ』後篇と『ペルシーレス』でのモリスコ描写の差（『ドン・キホーテ』後篇にはキリスト教徒スペイン人の文化に深く同化したカスティリャ地方のモリスコが登場するのに対し，『ペルシーレス』では，キリスト教徒とほとんど融合せず，自ら望んで北アフリカの私掠船団に運ばれてかの地に移住するバレンシア地方のモリスコたちが描かれている）につながっているという指摘も近年なされている（Márquez Villanueva, *Personajes y temas del* Quijote, pp. 307–311; Trevor J. Dadson, "Convivencia y cooperación entre moriscos y cristianos del Campo de Calatrava: de nuevo con Cervantes y Ricote", in Pierre Civil (ed.), *Siglos dorados. Homenaje a Augustin Redondo*, 2vols., Madrid: Castalia, 2004, I, pp. 301–314; "Cervantes y los moriscos de la Mancha", in Nuria Martínez de Castilla Muñoz & Rodolfo Gil Benumeya Grimau (eds.), *De Cervantes y el Islam. Actas del encuentro Cervantes, El «Quijote», lo moro, lo morisco y lo aljamiado celebrado en Sevilla, los días 19–21 de mayo de 2005*, Madrid: Sociedad Estatal de Conmemoraciones Culturales, 2006, pp. 135–150）。

その他の興味深い近年の研究を挙げると，Francisco Latorre, "La transformación de Ricote el morisco", *Iberoromania*, 10（1979），pp. 77–84は，後篇54章のリコーテが信仰の面などで曖昧さを示しているのに対し，63–65章のリコーテはキリスト教徒スペイン人として理想化されていると指摘している。Edwin Williamson, "Romance and Realism in the Interpolated Stories of the *Quixote*", *Cervantes*, 2.1（1982），pp. 63–66は，アナ・フェリスとドン・ガスパル・グレゴリオの愛のエピソードに，ロマンス的な文学上の決まり事と複雑な人間的問題の衝突があること，それが結果として開かれた結末をもたらしていることを指摘している。Carroll B. Johnson, "Ortodoxia y anticapitalismo en el siglo XVII: el caso del morisco Ricote", in Joseph V. Ricapito (ed.), *Hispanic Studies in Honor of Joseph H. Silverman*, Newark: Juan de la Cuesta, 1988, pp. 285–296は，モリスコ追放の様々 ↗

先行研究において主要な議論が出尽くした感があるのだが，しかしながら，研究を深化させる余地は残されていると思われる。

16－17世紀のイスラーム世界とキリスト教世界のあいだで揺れ動いた人間集団はモリスコ以外にも存在し，セルバンテスはその作品群において，そうした諸集団にも強い関心を示している。セルバンテスのモリスコ表象は，そのような諸集団の表象と合わせて考察する必要があると思われる。

本稿では，そうした新たな解釈の一つの試みとして，このエピソードにおいて目立たないが重要な役割を果たすスペイン人改宗者[7]に注目し，この人物の存在がエピソードに投げかけ

な経済的側面のすべてがリコーテのエピソードに凝縮されていると論じている。Georges Güntert, *Cervantes. Novelar el mundo desintegrado*, Barcelona: Puvill, 1993, pp. 86–99は，中世的伝統と近代の新しいメンタリティのあいだで揺れ動く存在としてリコーテ父娘とドン・キホーテ主従を分析している。Caroline Schmauser, “Ricote, Sancho y los peregrinos (*Don Quijote* II, 54): comunicación verbal y no verbal en los cuentos interculturales”, in Caroline Schmauser y Monika Walter (eds.), *¿«¡Bon compaño, jura Di!»? El encuentro de moros, judíos y cristianos en la obra cervantina*, Frankfurt am Main: Vervuert, 1998, pp. 71–89は，『ドン・キホーテ』後篇第54章の，巡礼の一員に身をやつしたリコーテとサンチョが出会う場面のコミュニケーションのあり方を分析し，そこにキリスト教神学の反映を見出すとともに，モリスコ問題に関する多義的な見方を読み取っている。José Luis Abellán, “Cervantes y el problema morisco”, in Antonio Bernat Vistarini (ed.), *Volver a Cervantes. Actas del IV Congreso Internacional de la Asociación de Cervantistas, Lepanto, 1/8 de octubre de 2000*, 2vols., Palma: Universitat de Illes Balears, 2001, I, pp. 297–302は，スペインを批判する役割を果たす「内的亡命者」としてのドン・キホーテの造形を指摘し，そのような視点を持ったセルバンテスはリコーテに同情していたはずで，モリスコ追放を支持したはずがないと論じている。Gonzalo Díaz Migoyo, “La paradójica identidad del morisco Ricote”, in Chul Park (ed.), *Actas del XI Coloquio Internacional de la Asociación de Cervantistas, Seúl, 17–20 de noviembre de 2004*, Seoul: Hankuk University of Foreign Studies, 2005, pp. 43–51は，リコーテのアイデンティティに着目し，スペイン人としての愛国心を持つにもかかわらず見せかけのスペイン人としかみなされない点に問題の本質を見出している。Christina H. Lee, “Don Antonio Moreno y el ‘discreto’ negocio de los moriscos Ricote y Ana Félix”, *Hispania*, 88.1 (2005), pp. 32–40は，リコーテ父娘を歓待するバルセロナの有力者ドン・アントニオ・モレノに，彼らを搾取しようとする腹黒い意図を読み取っている。Julia Domínguez, “El laberinto mental del exilio en *Don Quijote*: El testimonio del morisco Ricote”, *Hispania*, 92.2 (2009), pp. 183–192は，亡命者特有の複雑な心理という観点からリコーテの内面と彼の発言を分析している。Luis F. Bernabé Pons, “De los moriscos a Cervantes”, *eHumanista/Cervantes*, 2（2013），pp. 156–182は，モリスコ追放が完了してから出版された『ペルシーレス』や『ドン・キホーテ』後篇の，モリスコが登場するエピソードが，追放という歴史的現実，モリスコ全体を一元的に貶める公的言説，ありえたかもしれないもうひとつの現実（モリスコの社会統合）についての省察に読者をいざなっていると論じている。

本稿の内容と密接にかかわるその他の重要な先行研究については，この先の注で随時紹介する。

7 この改宗者に言及した先行研究は，ごくわずかである。Díaz Migoyo, *op.cit.*, p. 50は，この改宗者とドン・ガスパル・グレゴリオは，モリスコのリコーテ父娘とは異なり，旧キリスト教徒としての不変のアイデンティティを持ち，一時的に他のアイデンティティを偽装しても，疑念を招くことなく元のアイデンティティを回復できると論じている。Enrique Martínez López, “Sobre la amnistía de Roque Guinart: El laberinto de la bandositat catalana y los moriscos en el *Quijote*”, *Cervantes*, 11.2 (1991), pp. 72–73は，この改宗者がリコーテ父娘やドン・ガスパル・グレゴリオと同様，善良だが人種と宗教の紛争に巻き込まれ，バルセロナで裁きを受けることになった周縁的な存在であると指摘している。

る意味について考察する[8]。

2. リコーテ父娘のエピソードにおけるスペイン人改宗者の役割，歴史背景，セルバンテスの他作品との関連

リコーテはサンチョと同郷のモリスコで，追放を予見してドイツに渡り新たな居住先を確保する。スペインに隠しておいた財産を持ち出すためにドイツ人の巡礼に変装して帰国したところサンチョに出会い，自分の妻子が追放に巻き込まれて，不本意にも一族とともに北アフリカに移住させられたことを聞かされる（54章）。その後二人は別れるが，ドン・キホーテ主従がバルセロナに滞在していたとき，アルジェからの私掠船と思しき船が拿捕され，その船長が実は男装のアナ・フェリスであることが判明する。彼女は自分が真摯なキリスト教信仰にもかかわらずアルジェ移住を余儀なくされたこと，自分に思いを寄せる旧キリスト教徒（ユダヤ教徒やムスリムを祖先に持たないキリスト教徒）の青年ドン・ガスパル・グレゴリオ（don Gaspar Gregorio）がモリスコに変装して，追放される彼女らの一行に同行して自らもアルジェに渡り，ムスリムの同性愛的欲望を避けるため女性であると偽ることを強いられ，オスマン帝国のスルタンへ献上されるのを軟禁されながら待つ危機的状況に陥ったこと，自分はスペインに残した財産を掘り出すという口実でアルジェ王[9]の手配した船でスペインに戻ってきたことを語るが，ここで改宗者が登場する（63章）。

名前を与えられていないこの改宗者は，スペインに帰国してイスラームからキリスト教へ復帰することを望んでおり，そのひそかな意図とともに，アナ・フェリスの帰国に同行している。そして当初は，アルジェからの私掠船の船長と誤認されたアナ・フェリスとともにバルセロナの当局に捕縛されるものの，アナ・フェリスの素性が明かされたあとは，アルジェからドン・ガスパル・グレゴリオを救出する方略を具申し，アルジェ近辺の状況に関する知識を活かして自らこの作戦を指揮し成功させ，最後は望み通りにキリスト教への復帰を果たす（63–65章）。

ここで重要なのは，イスラームからキリスト教への復帰を望むこの人物が，当時の歴史的状況を反映しているとともに，セルバンテスの他作品にも同種の人物がしばしば登場することである。

---

8 『ドン・キホーテ』前・後篇からの参照・引用にあたっては，Miguel de Cervantes Saavedra, *Don Quijote de la Mancha*, ed. del Instituto Cervantes dirigida por Francisco Rico, Madrid: Real Academia Española, 2015を用いた。引用箇所を示すさいは，本稿筆者による日本語訳の直後に（頁数）で該当箇所を示す。［ ］は本稿筆者による補足を示す。

9 オスマン帝国のアルジェ総督のことだが，セルバンテスの時代のスペインでは，「王」と呼ばれることが一般的だった。

歴史的状況を概観すれば，キリスト教からイスラームへの改宗者の問題は，16－17世紀のスペインならびにヨーロッパ諸国において，イスラームの地に捕らわれたキリスト教徒虜囚たちの問題と連関し，きわめて深刻に受け止められていた。

改宗者のうち，イスラームへの改宗を後悔しキリスト教への復帰を望む改宗者すなわち「悔い改める改宗者」（スペイン語で “renegados arrepentidos” という）も16－17世紀に数多く出現した。彼らが様々な手段で自発的に帰国を果たした場合は，スペインをはじめとするカトリック圏では異端審問所に出頭する必要があったが，彼らに下された処分は，概して，修道院でキリスト教教義の再習得を課せられる程度の寛容なものにとどまった[10]。これは，スペインにおいてモリスコたちが置かれた立場――異端審問所に厳しく監視・抑圧され，信仰の問題に関し処罰対象となっていた[11]――と著しく対照的であったと言える。

さて，この「悔い改める改宗者」は，セルバンテスがその作家生活を通して好んだ人物類型でもあり，現存する彼の作品において，リコーテ父娘のエピソードも含め 4 度登場するが，その描写は，上記の歴史的現実に沿ったものである。セルバンテスの描くこれら「悔い改める改宗者」たちはいずれも，二つの宗教・文化世界にまたがる仲介者としての性格を持ち，またしばしばそれを活かして，キリスト教徒のイスラーム世界からの脱走・帰国に協力する（それは，キリスト教信仰と祖国への忠誠を証明して罪滅ぼしをする機会となる）。そして自らも帰国を実現した場合は，教会復帰をいとも簡単に果たす。

ここで，『ドン・キホーテ』後篇以外のセルバンテス作品に登場する 3 人の「悔い改める改宗者」をみてみよう。

『ドン・キホーテ』前篇（1605）に入れ子状に挿入された短篇小説「捕虜の話」（“La historia del cautivo”）に登場する「ムルシア生まれの改宗者」は，アラビア語の知識を活かしてアルジェでキリスト教徒虜囚ルイ・ペレス・デ・ビエドマ（Ruy Pérez de Viedma）とキリスト教への改宗を望む高貴なモーロ人[12]女性ソライダ（Zoraida）の出会いを仲立ちし，彼ら二人と他のキリスト教徒虜囚たちのアルジェ脱出を助けて，自らも帰国と教会復帰を果たす。その結末は，ルイ自身によって次のように語られる。「六日間我々はベレスに滞在しました。その後，改宗者は，自分に必要なすべての情報を報告書にまとめたので，聖なる異端審問所を介して教会の聖なる信徒団に復するため，グラナダの町へ向かいました」（492）。

1615年出版の戯曲集に収録された戯曲『アルジェの牢獄』（*Los baños de Argel*）に登場する

10　改宗者をめぐるこうした歴史的状況については，Bartolomé Bennassar & Lucile Bennassar, *Les Chrétiens d'Allah. L'histoire extraordinaire des renégats, XVIe -XVIIe siècles*, Paris: Perrin, 2e éd, 2001（1e éd, 1989）が詳しい。

11　Domínguez Ortiz & Vincent, *op.cit.*, pp. 102–106; Henry Kamen, *The Spanish Inquisition: An Historical Revision*, London: Phoenix, 2000, pp. 214–229.

12　16－17世紀スペインの文学や歴史記述において，「モーロ人」（moros）は，一般に北アフリカのアラブ・ベルベル系のムスリムを指す。

ハセン（Hazén）は，「捕虜の話」の「ムルシア生まれの改宗者」同様，翻訳者としての役割を果たして，キリスト教徒虜囚ドン・フェルナンド（don Fernando）とキリスト教への改宗を望むモーロ人女性サアラ（Zahara）の出会い[13]を手助けし，キリスト教徒虜囚たちの自由回復のきっかけを作るが，故郷に私掠船を誘導しかつての同胞たちを虜囚生活に追いやった別の改宗者イスフ（Yzuf）を殺害し，キリスト教信仰を告白しながらアルジェで殉教する。その結果，自分の帰国と正式な教会復帰は果たせない。

短篇集『模範小説集』中の一篇「寛大な恋人」（“El amante liberal”）に登場するマハムート（Mahamut）はキプロス島に暮らすシチリア人改宗者で，同郷のキリスト教徒虜囚リカルド（Ricardo）とレオニーサ（Leonisa）の島からの脱走に協力し，自らも帰国と教会復帰を果たし，ギリシア人改宗者でやはり教会に復帰した女性ハリーマ（Halima）と結婚する（さらに，キリスト教徒たちが脱走時にトルコ人の船を乗っ取り財宝を奪ったので，マハムートもその分け前を得る）。語り手によれば，次のような次第である。「マハムートとハリーマは教会と和解した。ハリーマはリカルドの妻となる望みを果たすのが無理になったので，マハムートの妻となることで満足した」[14]。

このように，「悔い改める改宗者」は，リコーテ父娘のエピソードにのみ登場するのではなく，歴史的状況を反映しつつ他作品にも登場する，セルバンテスにとってこだわりのある，重要度の高い人物類型である。そして他作品においてキリスト教徒虜囚たちの自由回復と帰国に協力すること，イスラーム世界とキリスト教世界のあいだの仲介者となることは，アナ・フェリスのエピソードにおける改宗者の役割と共通性を持つ[15]。

一方，前述のように，モリスコも，モリスコ追放という重大な歴史的事件を反映しつつ，セルバンテスが特に晩年の諸作品において頻繁に取り上げた人物類型であり，前述のように，『ドン・キホーテ』後篇以外でも，『模範小説集』中の「犬の対話」や遺作長篇『ペルシーレス』に登場する。そしてこの2種類の人物類型が同一ストーリーの中で直接かかわり合う唯一のテクストが，リコーテとアナ・フェリスのエピソードなのである。

であるならば，リコーテ父娘のエピソードでこの改宗者が持つ意味について考察する価値が十分にあろう。

13　このドン・フェルナンドとサアラのエピソードは，「捕虜の話」のルイ・ペレス・デ・ビエドマとソライダのエピソードに酷似している。

14　Miguel de Cervantes Saavedra, *Novelas ejemplares*, ed. Jorge García López, Madrid: Real Academia Española, 2013, p. 159.　日本語訳は本稿筆者による。

15　「捕虜の話」「寛大な恋人」『アルジェの牢獄』では，改宗者が通訳・翻訳者としての役割を果たすが，リコーテ父娘のエピソードにおいて，改宗者のそのような役割は描かれない。アナ・フェリスがスペイン語を完璧に話すからである。しかしエピソードの最終局面でこの改宗者がドン・ガスパル・グレゴリオ救出に貢献する点にみられるように，二つの文化世界のあいだの仲介者という性格はやはり保持している。

3.　リコーテ父娘のエピソードで「悔い改める改宗者」が持つ意味：父娘との対比

リコーテ父娘のエピソードで「悔い改める改宗者」が持つ意味は，この改宗者の簡単な教会復帰を描くことが，キリスト教化しつつある，あるいは完全にキリスト教化したモリスコをも追放するという政策の冷酷さを強調する効果を持つという点にあると思われる。改宗者もモリスコも，キリスト教とイスラームの境界線上を行き来した存在であったが，前者に対するスペイン社会の寛容さを描くことは，後者に対する残酷さを間接的に際立たせていると考えられる。

先述のように，リコーテとアナ・フェリスのエピソードが舞台をバルセロナに移してから登場する改宗者は，アナ・フェリスとその恋人ドン・ガスパル・グレゴリオの再会を実現するために重要な役割を果たすのだが，その過程で，この人物とモリスコのリコーテ父娘の対比が，様々な面において浮き彫りになってゆく。

リコーテ，アナ・フェリスの父娘と改宗者の置かれた状況は同じではないが，キリスト教世界とイスラーム世界という二つの世界の境界線上で生きている点，程度の差はあれ当時のスペイン当局から警戒される対象であった点は共通する。またアナ・フェリスと改宗者の二人に絞れば，アルジェでの生活を拒み，キリスト教信仰に駆られてスペインに戻ってくるという点で，置かれた立場は類似する。しかし，スペインが彼らをどう受け入れたかは，大きく異なるものとして描かれている。

モリスコのリコーテ父娘が祖国愛とキリスト教信仰――アナ・フェリスのキリスト教信仰は真摯なものであり，リコーテの場合も，スペイン語能力は高くスペイン人意識は強烈で，信仰心もキリスト教に接近しつつある[16]――にもかかわらず追放の対象となり[17]，帰国が許さ

16　リコーテは再会したサンチョに次のように言う。「わしらはどこにいてもスペイン恋しさに泣いているよ。結局のところ，わしらはここで生まれたし，わしらの生まれながらの祖国だからね。[…] わしらは幸福を失ってはじめて，それを実感しているんだ。わしらのほとんど全員がスペインに戻りたいと思っているその望みは実に強烈なもんだから，わしのようにスペイン語ができる者の大部分は，その数は多いんだが，スペインに戻って来るんだ［…］。スペインに対する彼らの愛はそれほどのものなんだよ」(1170–1171)。「[…] わしは娘のリコータ［アナ・フェリスのこと］と妻のフランシスカ・リコータがカトリックのキリスト教徒であることをよく知っているよ。わしはそれほどではないけれど，それでもモーロ人というよりははるかにキリスト教徒だし，いつも神に，わしの分別の目を開いてください，どのようにお仕えすればよいか教えてくださいとお願いしているよ」(1172)。

17　モリスコのキリスト教化の程度については様々な議論があるが，真摯なキリスト教徒となっていたモリスコが存在したのは確かである。特にムルシアのリコーテ谷――この地名が，『ドン・キホーテ』後篇のリコーテという人物名の由来となったと目される――のモリスコたちにその傾向が強かった（Márquez Villanueva, *Personajes y temas del Quijote*, pp. 253–257; *El problema morisco*, pp. 132–138; Domínguez Ortiz & Vincent, *op.cit.*, pp. 198–199）。

れるかどうかも曖昧なまま作品から姿を消す[18]のに対し，一度はムスリムとなった過去を持つ改宗者は，帰国と教会復帰が簡単に許され，ドン・ガスパル・グレゴリオ救出の報酬も受け取る。その両者の対比を，我々はこのエピソードのなかに読み取ることができる。

アナ・フェリスと改宗者が作品に登場しそれぞれの素性が明らかになる場面においては，バルセロナの人々の反応は，アナ・フェリスに対しより好意的である。それが，二人のその後の運命の対称性をいっそう強調する。

アナ・フェリスは，「私は生まれながらのトルコ人でも，モーロ人でも，改宗者でもありません」「キリスト教徒の女です」（1258）と，当時のスペイン人にとってよく知られた3種類のムスリム[19]を引き合いに出して自分がキリスト教徒であることを明確にしたあと――ここで，改宗者という人間類型をムスリムの一員として明示し，信仰のうえで自分と区別していることは重要である――，自分が幼少時から一貫してキリスト教信仰を抱いていたことを強調する[20]。その真摯なキリスト教信仰と誠実さは，彼女の身の上話や，父リコーテとサンチョの証言を聞いた皆が信じる。

一方，その場に縁者の居合わせない改宗者は，当初はアナ・フェリスが保証人をつとめることになる。アナ・フェリスは，自分が，一度イスラームに帰依した改宗者とは信仰の面で異なる立場にあることを先述のように指摘しつつも，改宗者をバルセロナの人々に紹介し，

---

18 かつては，アナ・フェリスとリコーテがバルセロナの有力者たちに一時保護されることじたいが非現実的だとみなす研究者もいた（Vicente Llorens, “Historia y ficción en el «Quijote»”, in Geroge Haley (ed.), *El «Qujote» de Cervantes*, Madrid; Taurus, 1980, p. 262.）。しかし近年では，Diane S. Williams, “‘De moriscos padres engendrada’: Ana Félix and Morisca Self- (RE) Presentation”, in Edward H. Friedman & Catherine Larson (eds.), *Brave New Words: Studies in Spanish Golden Age Literature*, New Orleans: University Press of the South, 1996, pp. 135–144が，真摯なキリスト教信仰を訴えスペイン残留を願うアナ・フェリスの言説が，追放当時にスペイン残留を請願したモリスコ女性たちの用いた言説に類似していることを指摘し，副王ら作中のバルセロナ有力者たちの好意，史実のサラサール伯（モリスコ追放の実施を担当した人物で，リコーテは無慈悲で厳格な人物として言及している。本稿53頁参照）がじっさいには多くのモリスコの残留を認めたこと，歴史的現実としてもスペイン残留を認められたモリスコが一定数存在したことから，アナ・フェリスとその家族のスペイン残留は楽観視できるものであると主張している。Juan Manuel Villanueva Fernández, “Los moriscos: el episodio de Ricote, ¿sentido irónico o simple historia?”, in Christoph Strosetzki (ed.), *Visiones y revisiones cervantinas: actas selectas del VII Congreso Internacional de la Asociación de Cervantistas*, Alcalá de Henares: Centro de Estudios Cervantinos, 2011, pp. 911–920も，同様に，スペインに残留，あるいは帰国したモリスコの存在という観点から，リコーテとアナ・フェリスのエピソードの再解釈を提唱している。

こうした近年の新しい研究は注目に値するが，当時の一般読者が残留・帰国モリスコについてどれだけの知識を持っていたかという点は，慎重に考えねばならないと思われる。

19 「生まれながらのトルコ人」（turcos de nación）は，トルコ語を母語とするムスリムを指す。キリスト教からイスラームへの改宗者が「信仰のトルコ人（turcos de profesión）」と呼ばれたので，それと区別するために使われた用語である。「モーロ人」については，注12を参照。

20 Williams, *op.cit.* pp. 141–142は，アナ・フェリスがここでスペインと異質なアイデンティティを自分に対し否定し，またキリスト教信仰を強調することでモリスコ共同体と自分を区別していると指摘している。

彼がキリスト教復帰を望んでいることを明かす。そしてドン・ガスパル・グレゴリオ救出が話題になると，自分がこの救出作戦を指揮すると改宗者は自ら申し出るのだが，当初は全幅の信頼を得ることができない。改宗者が信頼できることを保証するのは，再びアナ・フェリスである。

> 多くの方策が提案されたが，先述のスペイン人改宗者が出した策にまさるものは一つもなかった。彼は櫂が 6 本以下でキリスト教徒の漕手のいる何らかの小さな船でアルジェに戻ることを申し出た。どこに，どのように，いつ上陸することができるか，すべきか自分はわかっており，またドン・ガスパルのいる家も知らないわけではないからというのが理由であった。提督［バルセロナのガレー船艦隊の司令官］と副王は改宗者を信頼してよいものか，櫂を漕ぐことになるキリスト教徒たちを彼にゆだねてよいものか迷った。アナ・フェリスが彼のことを保証し，父親リコーテは，もし一行が失敗すれば，キリスト教徒たちの身請けを自分がする用意があると言った。(1262–1263)

しかし，バルセロナの人々のこうした当初の印象にもかかわらず，改宗者の尽力によってドン・ガスパル・グレゴリオが帰国を果たしたあと，教会とスペイン社会への復帰をじっさいに簡単に実現するのは，自分の行動によってようやく信頼を得た改宗者の方である。ドン・ガスパル・グレゴリオ救出のため彼が自分の身を危険にさらしたのは確かだが，しかしそれは無償の奉仕というわけではない。リコーテから手厚い報酬を得るからである。

> 最後に，リコーテは，改宗者にも，櫂を漕いだ者たちにも，ふんだんな支払をして満足させた。改宗者は教会に復帰し，そのしもべとなった。そして償いと悔悛によって，教会の腐敗した手足であったのが，清く健全になった[21]。(1272–1273)

改宗者のこうした簡単な教会・社会復帰の記述の直後に，リコーテ父娘の曖昧な結末の描写がなされる。副王らバルセロナの有力者たちはリコーテ父娘のスペイン残留を願って二人を一時的に保護し，有力者の一人ドン・アントニオ・モレノ（don Antonio Moreno）は，宮廷で賄賂を用いた裏工作をすることを提案するが，リコーテは，それは無駄だと言う。直前に示された，改宗者の簡単な教会・社会復帰との対比が，ここに浮き彫りになる。

21　ここで想起されるのは，「腐敗した手足」（“miembro podrido”）が，モリスコ追放を支持する著作家たちがスペイン社会におけるモリスコの位置づけを表すさいにしばしば用いた表現であるということである。彼らはスペイン社会を身体に，モリスコたちをその身体の病気に侵された部分にたとえた（Bunes Ibarra, *op.cit.*, p. 38）。

それから二日後，副王はアナ・フェリスとその父がスペインにとどまるためにどのような方策がありうるのか，ドン・アントニオと相談した。かくもキリスト教信仰の深い娘と，一見したところかくも善良な父親がスペインにとどまることに，何の不都合もないように思われたからである。ドン・アントニオは交渉のために宮廷に赴くことを申し出た。他の案件のためにどうしてもそこへ行かねばならないからと，そして後ろ盾と袖の下を用いれば，多くの困難なことが実現するのだと述べた。

「それは無理ですよ」と，この会話に居合わせたリコーテが言った。「後ろ盾も袖の下も，あてにすべきでありません。なぜなら，陛下が我々の追放の任をお与えになった偉大なるサラサール伯ドン・ベルナルディーノ・ベラスコに対しては，懇願も，約束も，袖の下も，悲嘆も，何の力も持たないからです［…］」。(1273)

このように，リコーテ父娘のエピソードにおいては，テクスト内部に，モリスコの父娘と改宗者それぞれが置かれた状況の対比が含意されていると考えられる。それは同時に，テクスト外の歴史的状況を反映したものでもある。先述のように，歴史的に見ても，モリスコは，洗礼を受けたキリスト教徒であるにもかかわらず，キリスト教に背いたという疑いをかけられた存在であった。また改宗者同様，信仰の問題に関しては，これもすでにみたように，異端審問所がモリスコを裁いたことも忘れてはならない。だがイスラームへの改宗を後悔してキリスト教復帰を望み，自発的に帰国した「悔い改める改宗者」たちに対し，異端審問所そしてスペイン社会全般が前述のように寛容であり，彼らの社会復帰が容易であったのに対し，モリスコは，たとえ真摯なキリスト教徒となった者であっても，常にそのキリスト教信仰を疑われ，厳しく抑圧された。最終的にはほとんどのモリスコが追放の対象となり，例外的にスペイン残留を認められるためには，厳しい審査を経る必要があった[22]。

語り手が明確なメッセージを言葉のうえで残しているわけではない。しかしながら，過酷な運命に見舞われたモリスコのリコーテ父娘，とりわけ真摯なキリスト教信仰を持つにもかかわらずスペイン残留が認められるかどうか定かでないアナ・フェリスのエピソードにおける，容易に教会復帰と社会復帰を果たす改宗者の存在は，そうしたテクスト外の歴史的現実とも結びつき，同時代の読者に多くの問いを発していたように思われる。少なくとも，真摯なキリスト教徒となったモリスコを追放する一方で，いったんムスリムとなった者を寛大に迎え入れるという二つの政策のあいだの齟齬は，同時代の注意深い読者の前に浮かび上がったであろう。

22　モリスコ共同体との断絶とキリスト教信仰を証明できたモリスコや，旧キリスト教徒と結婚したモリスコ女性などには追放の例外となるチャンスがあったが，そのためには地元の公証人と聖職者のヒアリングから始まる複雑な審査手続きがあった（Williams, *op.cit.*, pp. 135–141）。

4. む　す　び

『ドン・キホーテ』後篇のリコーテ父娘のエピソードには，モリスコの父娘と「悔い改める改宗者」の対比を読み取ることができる。それはまた，同時代の異端審問所やスペイン社会がモリスコと帰国改宗者それぞれに対して異なる対応を示していたという歴史的現実をも反映している。そこに最終的にどのようなメッセージを読み取るかは読者しだいであるが，改宗者とモリスコ双方にセルバンテスが強い関心を抱いていたことを想起すれば，両者を同一エピソードに配したことは，彼なりの問題意識を受けてのものであったと思われる。また，イスラーム世界に捕われたキリスト教徒虜囚の問題と連動した改宗者の問題が，モリスコ問題同様に，当時のスペイン社会にとって重要な問題であったことを考えれば，同時代の読者にとっても，様々な問いを発するものであったと考えられる。

16－17世紀の地中海両岸を行き来した人間集団は様々なものが存在し，モリスコは，あくまでその一つであった。セルバンテスの作品におけるモリスコの表象を考えるさいには，そうした他の人間集団の表象も考慮に入れる必要があるだろう。本稿では，その一例を取り上げ考察した。

参　考　文　献

Abellán, José Luis, “Cervantes y el problema morisco”, in Antonio Bernat Vistarini (ed.), *Volver a Cervantes. Actas del IV Congreso Internacional de la Asociación de Cervantistas, Lepanto, 1/8 de octubre de 2000*, 2 vols., Palma: Universitat de Illes Balears, 2001, I, pp. 297–302.

Baena, Julio, “Sintaxis de la ética del texto: Ricote, en el *Quijote* II, la lengua de las mariposas”, *Bulletin of Spanish Studies*, 83.4 (2006), pp. 507–524.

Baquero Escudero, Ana L., “Variaciones literarias sobre la expulsión de los moriscos: Cervantes y Lope de Vega”, *Murgetana*, 131 (2014), pp. 11–23.

Bataillon, Marcel, *Erasmo y España: estudios sobre la historia espiritual del siglo XVI*, 2 vols., tr. Antonio Alatorre, México D. F.: FCE, 1950. 2ª ed. corregida y aumentada, 1966 (1ª ed. en francés, 1937).

Bennassar, Bartolomé & Lucile Bennassar, *Les Chrétiens d'Allah. L'histoire extraordinaire des renégats, XVIe-XVIIe siècles*, Paris: Perrin, 1989. 2e éd, 2001.

Bernabé Pons, Luis F., “De los moriscos a Cervantes”, *eHumanista/Cervantes*, 2 (2013), pp. 156–182.

Bunes Ibarra, Miguel Ángel de, *Los moriscos en el pensamiento histórico*, Madrid: Cátedra, 1983.

Candau Chacón, María Luisa, *Los moriscos en el espejo del tiempo. Problemas históricos e historiográficos*, Huelva: Universidad de Huelva, 1997.

Carrasco Urgoiti, María Soledad, “Musulmanes y moriscos en la obra de Cervantes: beligerancia y empatía”, *Fundamentos de Antropología*, 6–7 (1997), pp. 66–79.

————, “Presencia de la mujer morisca en la narrativa cervantina”, in Nuria Martínez de Castilla Muñoz & Rodolfo Gil Benumeya Grimau (eds.), *De Cervantes y el Islam. Actas del encuentro Cervantes, El «Quijote», lo moro, lo morisco y lo aljamiado celebrado en Sevilla, los días 19–21 de mayo de 2005*, Madrid: Sociedad Estatal de Conmemoraciones Culturales, 2006, pp. 117–133.

Castro, Américo, *El pensamiento de Cervantes*, Madrid: Imprenta de la Librería y Casa Editorial Hernando, 1925. *El pensamiento de Cervantes y otros estudios cervantinos (Obra Reunida, I)*, Madrid: Trotta, 2002.

Cervantes Saavedra, Miguel de, *Comedias y tragedias*, ed. Luis Gómez Canseco *et al.*, Madrid: Real Academia Española, 2015.

————, *Los trabajos de Persiles y Sigismunda*, ed. Carlos Romero Muñoz, Madrid: Cátedra, 2004.

————, *Novelas ejemplares*, ed. Jorge García López, Madrid: Real Academia Española, 2013.

————, *Don Quijote de la Mancha*, ed. del Instituto Cervantes dirigida por Francisco Rico, Madrid: Real Academia Española, 2015.

Dadson, Trevor J., "Convivencia y cooperación entre moriscos y cristianos del Campo de Calatrava: de nuevo con Cervantes y Ricote", in Pierre Civil (ed.), *Siglos dorados. Homenaje a Augustin Redondo*, 2 vols., Madrid: Castalia, 2004, I, pp. 301–314.

————, "Cervantes y los moriscos de la Mancha", in Nuria Martínez de Castilla Muñoz & Rodolfo Gil Benumeya Grimau (eds.), *De Cervantes y el Islam. Actas del encuentro Cervantes, El «Quijote», lo moro, lo morisco y lo aljamiado celebrado en Sevilla, los días 19–21 de mayo de 2005*, Madrid: Sociedad Estatal de Conmemoraciones Culturales, 2006, pp. 135–150.

Díaz Migoyo, Gonzalo, "La paradójica identidad del morisco Ricote", in Chul Park (ed.), *Actas del XI Coloquio Internacional de la Asociación de Cervantistas, Seúl, 17–20 de noviembre de 2004*, Seoul: Hankuk University of Foreign Studies, 2005, pp. 43–51.

Domínguez, Julia, "El laberinto mental del exilio en *Don Quijote*: El testimonio del morisco Ricote", *Hispania*, 92.2 (2009), pp. 183–192.

Domínguez-Navarro, David, "El mundo de la frontera: cambio de religión y choque cultural de los personajes moriscos del *Quijote*", in Christoph Strosetzki (ed.), *Visiones y revisiones cervantinas: actas selectas del VII Congreso Internacional de la Asociación de Cervantistas*, Alcalá de Henares: Centro de Estudios Cervantinos, 2011, pp. 285–291.

Domínguez Ortiz, Antonio & Bernard Vincent, *Historia de los moriscos. Vida y tragedia de una minoría*, Madrid: Revista de Occidente, 1979.

Güntert, Georges, *Cervantes. Novelar el mundo desintegrado*, Barcelona: Puvill, 1993.

Hitchcook, Richard, "Cervantes, Ricote and the Expulsion of the Moriscos", *Bulletin of Spanish Studies*, 81.2 (2004), pp. 175–185.

Johnson, Carroll B., "Ortodoxia y anticapitalismo en el siglo XVII: el caso del morisco Ricote", in Joseph V. Ricapito (ed.), *Hispanic Studies in Honor of Joseph H. Silverman*, Newark: Juan de la Cuesta, 1988, pp. 285–296.

Kamen, Henry, *The Spanish Inquisition: An Historical Revision*, London: Phoenix, 2000.

Latorre, Francisco, "La transformación de Ricote el morisco", *Iberoromania*, 10 (1979), pp. 77–84.

Lee, Christina H., "Don Antonio Moreno y el 'discreto' negocio de los moriscos Ricote y Ana Félix", *Hispania*, 88.1 (2005), pp. 32–40.

Llorens, Vicente, "Historia y ficción en el «Quijote»", in Geroge Haley (ed.), *El «Qujote» de Cervantes*, Madrid: Taurus, 1980, pp. 253–265.

López Fanego, Otilia, "Algo más sobre Sancho y Ricote", *Anales Cervantinos*, 21 (1983), pp. 73–81.

Márquez Villanueva, Francisco, *Personajes y temas del* Quijote, Madrid: Taurus, 1975.

————, *El problema morisco (desde otras laderas)*, Madrid: Libertarias, 1998.

Martínez López, Enrique, "Sobre la amnistía de Roque Guinart: El laberinto de la bandositat catalana y los moriscos en el *Quijote*", *Cervantes*, 11.2 (1991), pp. 69–85.

Menéndez Pelayo, Marcelino, *Historia de los heterodoxos españoles*, 3vols, Madrid: Librería Católica de San José, 1880–1881. Ed.facsímil, 3vols., Madrid: CSIC, 1992.

Moner, Michel, "El problema morisco en los textos cervantinos", in Irene Andres-Suárez (ed.), *Las dos grandes minorías étnico-religiosas en la literatura española del Siglo de Oro: los judeoconversos y los moriscos. Actas del "Grand Séminaire" de Neuchâtel. Neuchâtel, 26 a 27 de mayo de 1994*, Paris: Diffusion Les Belles Lettres, 1995, pp. 85–100.

Moreno Báez, Enrique, "Perfil ideológico de Cervantes", in Juan Bautista Avalle-Arce & Edward C. Riley (eds.),

Suma Cervantina, London: Támesis, 1973, pp. 233–271.
Quérillacq, René, "Los moriscos de Cervantes", *Anales Cervantinos*, 30 (1992), pp. 77–98.
Schmauser, Caroline, "Ricote, Sancho y los peregrinos (*Don Quijote* II, 54): comunicación verbal y no verbal en los cuentos interculturales", in Caroline Schmauser & Monika Walter (eds.), *¿«¡Bon compaño, jura Di!»? El encuentro de moros, judíos y cristianos en la obra cervantina*, Frankfurt am Main: Vervuert, 1998, pp. 71–89.
Torres Antoñanzas, Fernando, *Don Quijote y el absoluto. Algunos aspectos teológicos de la obra de Cervantes*, Salamanca: Publicaciones Universidad Pontificia de Salamanca, 1998.
Villanueva Fernández, Juan Manuel, "Los moriscos: el episodio de Ricote, ¿sentido irónico o simple historia?", in Christoph Strosetzki (ed.), *Visiones y revisiones cervantinas: actas selectas del VII Congreso Internacional de la Asociación de Cervantistas*, Alcalá de Henares: Centro de Estudios Cervantinos, 2011, pp. 911–920.
Williams, Diane S., "'De moriscos padres engendrada': Ana Félix and Morisca Self- (RE)Presentation", in Edward H. Friedman & Catherine Larson (eds.), *Brave New Words: Studies in Spanish Golden Age Literature*, New Orleans: University Press of the South, 1996, pp. 135–144.
Williamson, Edwin, "Romance and Realism in the Interpolated Stories of the *Quixote*", *Cervantes*, 2.1 (1982), pp. 43–67.
Zimic, Stanislav, *Los cuentos y los episodios del* Quijote, Madrid: Iberoamericana, 1998.

Summary

The Renegade in the Episode of the Morisco Ricote and His Daughter Ana Félix (*Don Quijote*, II)

Yasuhiro Mikura

This study analyzes the description of the Spanish renegade who, regretting his conversion to Islam and desiring a return to Christianity, plays an important role in the episode of the Morisco Ricote and his daughter Ana Félix, victims of the expulsion of the Moriscos (*Don Quijote*, II, 54, 63–65). Cervantes had as much interest in renegades who regretted their conversion to Islam as in Moriscos, and this episode, where both types of characters appear, is unique in Cervantine works.

This renegade accompanies Ana Félix in her return to Spain from Algiers. He also helps her lover, don Gaspar Gregorio, who is in a dangerous situation in Algiers, to escape from there. After that, the renegade easily reincorporates himself into Spanish society and the Catholic Church. This is in contrast to the severe destiny of Ricote and Ana Félix, who, despite their Spanish identity and Christian faith, become targets of the expulsion of the Moriscos, and whose possibility to be readmitted to live again in Spain is quite uncertain. The description of the renegade seems to have shown this contrast to the readers of the day.